

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	スコットランド・ゲール語を教授言語とする学校教育の実践に関する研究— ウェールズ語の取り組みと比較して				
研究組織	代表者	所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	米山 優子
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	米山 優子

講演題目	スコットランド・ゲール語を教授言語とする学校教育の実践に関する研究
研究の目的、成果及び今後の展望	<p><b>1. 目的</b></p> <p>本研究は、スコットランドの地域言語の一つであるスコットランド・ゲール語を通じた学校教育がどのように実施されているのか調査し、スコットランド・ゲール語法によって推進される教育の効果をウェールズ語の取り組みと比較して分析するものである。ウェールズの公用語であるウェールズ語の振興策は、ゲール語の振興策にとって先駆的な成功例とされてきた。ゲール語を教授言語とする教育の課題について、ウェールズ語の場合と比較して分析し、その成果を学会等で報告すると共に、本学での開講科目の教授内容として活用する。</p> <p><b>2. 成果</b></p> <p>ウェールズ語法を参考にして2005年に制定されたスコットランド・ゲール語法は、スコットランドの公用語というスコットランド・ゲール語の社会的地位を保障する最初の法律である。同法によって伝統的なゲール語圏以外の都市部でも、スコットランド・ゲール語を教授言語とする学校の需要が高まってきた。ウェールズでもウェールズ語を教授言語とする教育に注力しているが、2022年に実施された国勢調査では、ゲール語またはウェールズ語の能力がある住民の減少傾向が続いている。両言語は、話者数において少数派であっても言語法で使用が促進され、社会的地位が保障されている点で共通している。両言語を通じた学校教育の取り組みは、安定した教育的効果をもたらしている一方で、在学期間を過ぎると両言語の使用頻度や使用領域が激減するため、継続的な話者数の増加にはつながりにくい。社会人にとって両言語が幅広い使用領域で選択可能となる環境の整備は、スコットランドとウェールズの言語政策の最優先事項であると言える。以上のような分析をまとめた論文を所属学会の紀要に投稿する予定である。また、分析の結果を本学部の開講科目（「英米の社会と文化IA/IB」・「国際言語文化入門II」・「比較文化入門II」等）で講義した。</p> <p><b>3. 今後の展望</b></p> <p>英語の非母語話者である移民の存在に着目し、スコットランド・ゲール語に対する態度が英語の母語話者と異なるか、またゲール語の話者数に影響を及ぼしているか調査することを目指す。</p>